

# 木曽川水系における利水の概況

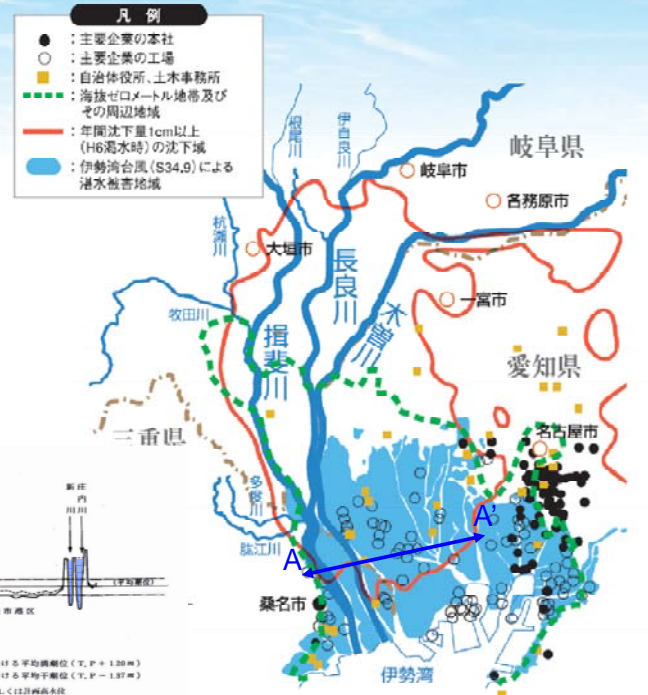
1. 木曽川水系の自然と社会状況
2. 木曽川水系の利水の現状

## 1. 木曽川水系の自然と社会状況



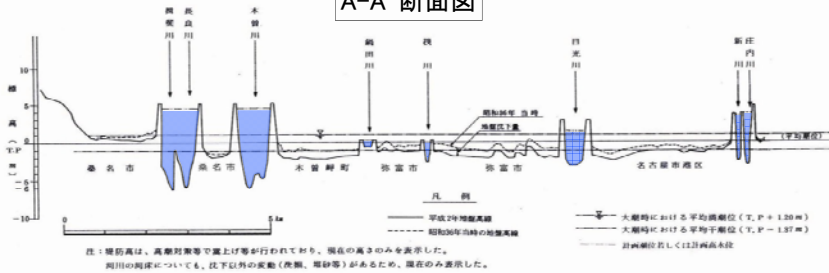
我が国最大の海拔ゼロメートル地帯

- 下流域は、濃尾平野の低平地が広がり、我が国最大の海拔ゼロメートル地帯。
- 高度経済成長期には、地下水の過剰な汲み上げ等により地盤が沈下。現在ではダムによる表流水への転換及び地下水の揚水規制が行われ、沈下は沈静化傾向。
- 平成6年渇水時には、異常少雨の影響の他、河川水の取水制限を補うために地下水が汲み上げられ、広域的な地盤沈下が発生。



木曽川水系の断面模式図

A-A' 断面図



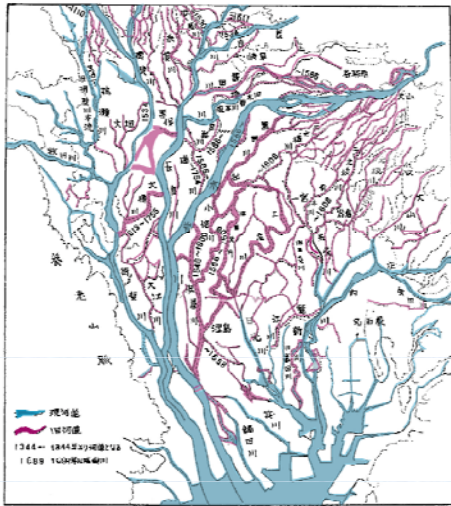
出典：平成20年における濃尾平野の地盤沈下の状況（平成20年8月東海三県地盤沈下調査会）

2. 木曽川水系の利水の現状

## 2. 木曾川水系の利水の現状

## 木曾川水系の歴史（治水）

- 中世以前の木曾三川は、川が運ぶ土砂によって形成された沖積平野である低平地を幾筋もの河道として網目状に流れていた。
- 江戸初期には、木曾川左岸に御囲堤（犬山市から弥富町まで約47km）が築造され、江戸中期には、三川を分流するための薩摩藩による宝暦治水が行われた。
- 明治に入ると、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケを迎え、木曾川下流改修が進められ、木曾・長良背割堤、長良・揖斐背割堤が築堤されるなど、下流域での三川分流が完成し、その後、大正から昭和にかけて、木曾川上流改修が行われ、現在の木曾三川の姿がほぼ形成された。



明治改修計画図



## 2. 木曾川水系の利水の現状

## 木曾川水系の歴史（水利用の変遷①）

- 木曾川は、かつては、木曾の山々から筏流しにより木材を運び出すための搬送路としても利用されていた。
- 農業用水については、昭和30年代以降の新たな農地開発等により需要が増大し、愛知用水や木曾川総合用水等の整備や、それらに伴う牧尾ダム・岩屋ダム等のダムによる水資源開発が行われた。
- 発電については、大正13年に我が国初の本格的なダム式発電所である大井ダムが造られたのを機にダム式発電所が急速に増加し、平成19年現在、これらのダムで発電に使用される最大使用水量の合計は約4,640m<sup>3</sup>/sで、年間発生電力量は全国一位である。

